

# I 国語問題

## 注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。  
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷ついたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

### マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
1 2 3 4 5
○ ○ ● ○ ○

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

久しい以前からのことではあるけれど、日用品のデザインに対して、人々の関心が広がっているように思える。それは雑誌や新聞などのメディアによるところが大きいといえるだろう。

日常の暮らしの空間に人々が目を向けたのは、ヨーロッパでは、一九世紀のことだ。「一九世紀ほど住むことに病的にこだわった世紀はなかった」とウアルター・ベンヤミンは指摘している。それは、一九世紀の産業ブルジョワジーに始まり、現在のわたしたちにいたっている。

一九世紀の産業ブルジョワジーが住むこと、つまり「室内」に病的にこだわったのは、私的な生活を「心地良い」ものにしたことと、その結果としてそれが、自らのアイデンティティに関わっていると感じていたからだ。室内を意味するインテリアという言葉は、同時に「内面」「精神」を意味する。つまり室内は、生活者の精神を反映している。一九世紀に力を持ち始めた産業ブルジョワジーは、しかし他方では、精神の支えの中心となる世界観を持ち得なかったがゆえに、より強固に、自らの存在と関わる室内にこだわったといえるだろう。

デザインに対する意識が高まるということは、その意識の多くが、室内へと向かうということである。というのも、衣服やアクセサリなどは身につけるものではあるけれど、その他のもののほとんどは、室内に置かれるからだ。

わたしたちが、なぜデザインに意識的になるのかということ、遠回りではあるけれど、もう少し室内に目を向けることから考えてみたい。室内とは、あらゆるものを入れておく空間(箱)である。したがって、生活者がどのようなデザインを使っているのか、あるいはどのようなデザインを好むのか、ということが室内に表れるといえるだろう。

たとえば、「探偵小説」では、事件が発生した室内をタネン<sup>(1)</sup>に描写することで、その室内に関わる人物を暗示し、やがて犯人を特定していく。室内とそこに集められた日用品や家具は、人物を暗示する遺留品である。遺留

品は、したがって所有者の自己表象となる。

(注<sup>3</sup>)  
コナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」シリーズでは、つねに室内に残されたものが事件解決の手がかりになる。こうした室内を手がかりとする探偵小説は、エドガー・アラン・ポーに始まるとされている。

室内に置かれたさまざまなものは、たまたまそこには居ない、つまり不在の居住者の姿を描き出す。

(2)  
視点をややずらすなら、ものや空間が不可視の存在を表象するということは、わたしたちが古くから経験的に認識してきたことである。ものや空間が、具体的な手がかり(表象)となるのはそれらのデザインによって、といえる。

たとえば、ヨーロッパの大聖堂にしても、日本の寺や神社にしても、そこには不在の聖なる人物(存在)をどのように暗示し表象するのかに力を注いできた。ステンド・グラスによる、いわばスライドショーのような画像、大日如来、あるいは神の依代(よしろ)となる御幣(注<sup>5</sup>)。それらは、誰もいまだかつて見たことのない非物質ともいべき不在の聖なる存在を物質によって表象し、その存在がいかなるものであるのかを暗示している。さらにいうなら、不在(非物質)の聖なる存在を暗示する物質の集合こそが大聖堂や寺や神社という物質的空間を生み出しているのである。つまり、ものや空間(ものや空間のデザイン)にそこには存在していない聖なるもの存在を暗示する力があることを、わたしたちは感じ取り、また認識してきたのである。

室内では、わたしたちは、多くのものに囲まれて生活している。それらは日々の生活を少しでも居心地の良いものにするために集められたものである。そうしたわたしたちを取り巻くものもまた、結果としてわたしたちの「痕跡」として自らの存在を表象している。<sup>(3)</sup> 聖なる空間に置かれたものも、生活空間に置かれたものも、どちらも、その空間の住み主の存在を表しているという点では、共通している。

聖なる空間を埋めるものは、不在の存在自身によって集められたものではもちろんない。人々の想像力によってつくられたものが集められている。人々の想像力が不在の存在を可視化しているのである。聖なる空間に置かれたものは不在者(神)の隠喩(メタファー)になっている。

他方、わたしたちの住まいには、わたしたち生活者自身が集めたものが埋まっている。それらのものは、それを集め、そこに生活している人物を表象している。ものは、それを所有している人間の換喩メトニミー（あるものを表現するのに、それと密接な関係のもので置き換えて表す）あるいは提喩シメタ（部分で全体を表す）になっているといっている。つまり、ものはその所有者自身の「部分」になっているのである。

ヴァルター・ベンヤミンは、たびたびものと空間が主体の表象になりうることを記述している。『パリ——一九世紀の首都』の中では、次のように書いている。

室内は私人の宇宙であるだけでなく、彼が閉じこもる容器でもある。(注7) ルイ・フィリップ以来、ブルジョワのなかには、大都市での私的な生活の形跡の不在を取り戻したいという傾向が見られる。……第二帝政様式において、アパルトマンは一種のキャビンとなり、その居住者の痕跡が室内に型として残る。これらの痕跡を調べ、跡をたどる探偵小説は、ここから生まれてくる。エドガー（・アラン）・ポーは『家具の哲学』と『探偵小説』で、室内を対象とする最初の(注8)カンソウ家となるのだ。初期の探偵小説では、犯人は紳士でもごろつきでもなく、ブルジョワジーの単なる私人にすぎない。

一九世紀のブルジョワは自身が「心地良く」閉じこもるための容器としての室内のしつらいに心を□。その室内には住み手の「痕跡」が残される。そうした状況の中で、他方では、室内とそこに集積されたものを対象に、生活している人物（主体）を吟味する試みが、すでに探偵小説の中で行われていたというのだ。

今日、わたしたちが生活する室内に集められた膨大なものは、もちろん自身がつくり出したものではなく、商品として購入したものがほとんどである。したがって、誰もが、同じものを室内に置いており、そこに個人（主体）の違いは読みとれないのではないかという気もする。けれども、所有された商品は、人それぞれ、さまざまなやり方によって、固有のものへと再編されていく。このことを(注8)ミシェル・ド・セルトーは、「料理法」と称して

いる。<sup>(4)</sup>つまり、商品を独自に生活の中に組織するのである。そこに、人々（主体）の固有性（自己表象）を見ることができるのではないだろうか。

そうしたことを、わたしたちはそれとなく感じている。わたしたちが、身につけるものや室内に置くもののデザインに気づかない、こだわるのは、少しでも「心地良い」生活をつくるためである。さらには、結果としてそこに自身の姿が投影されるからであり、そこに自分の内面が反映されるからである。冒頭でふれたように、久しく、わたしたちのデザインに対する関心が広がっている。それは、一九世紀の産業ブルジョワジーが、それまでになく、「住むことにこだわった」ことの延長にあるといえるだろう。わたしたちは、住むこと、つまりデザインにこだわるほどの、簡単にいえば豊かさの中にいるということでもある。

（柏木博『デザインの教科書』による）

（注） 1 ヴァルター・ベンヤミン——ドイツの批評家（一八九二—一九四〇）。

2 ブルジョワジー——資本家階級。

3 コナン・ドイル——サト・アーサー・コナン・ドイル。イギリスの作家（一八五九—一九三〇）。

4 エドガー・アラン・ポー——アメリカ合衆国の作家（一八〇九—一八四九）。

5 大日如来——宇宙と一体と考えられる汎神論的な密教の教主。宇宙の実相を仏格化した根本仏。

6 御幣——神祭用具。白色または金銀・五色の紙を敷いに用いる榊や竹の串に挟んだもの。

7 ルイ・フィリップ——フランス国王。在位一八三〇—一八四八年（一七七三—一八五〇）。

8 ミシェル・ド・セルトー——フランスの哲学者（一九二五—一九八六）。

問

(A) 線部イ・ロを漢字に改めよ。(ただし、楷書かいしよで記すこと)

(B) 線部(1)について。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 自らの存在を意識することが困難な時代にあつて、室内にだけは自分の痕跡を残すことができたから。
- 2 産業革命により生活が豊かになり、個人的な好みにあつた家具類が手軽に購入できるようになったから。
- 3 「探偵小説」の登場により、室内の日用品類が不在の居住者の表象として機能するようになったから。
- 4 それまで自由を制限されてきた反発から、自分のアイデンティティを主張することが流行していたから。
- 5 室内に注目することは、産業ブルジョワジーに必要な自らの「内面」を鍛錬することと同義であつたから。

(C) 線部(2)について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 事件に関わる遺留品から犯人を特定する過程は、初期の探偵小説から現在まで変わらず描写されている。
- 2 東洋と西洋で独自に育まれてきた生活様式は、それぞれの地域の歴史的資料により明らかにされている。
- 3 産業ブルジョワジーが好んだ日用品は、現在に至るまでそのデザイン性において関心を引き続けている。
- 4 目に見えない存在を認識するための手がかりが、架空の創造物から生活者自身の収集物に変化している。
- 5 宗教に関わる用具や建造物は、古今東西を問わず聖なる存在を具現するものとして有効に作用している。

(D) 線部(3)について。ここでいう「聖なる空間に置かれたもの」と「生活空間に置かれたもの」の相違点は何か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 前者は不可視の聖なる存在を可視化するもの、後者は人々の住まいの様子を表現するもの。
- 2 前者は製作者や製作年が不確かなもの、後者は製作者や製作年を明確に特定できるもの。
- 3 前者は目に見えないものの姿形を想像できるもの、後者は所有者の一部分だと他人が認識できるもの。
- 4 前者は見たことのないものを想って作られたもの、後者は所有者が収集した自己表象となるもの。
- 5 前者は聖なる存在者自身が使用したとされるもの、後者は所有者自身が実際に使用しているもの。

(E) 空欄  にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 うばわれていた
- 2 おどらせていた
- 3 くだいていた
- 4 かたむけていた
- 5 つくしていた

(F) 線部(4)について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 使用目的に沿った便利な商品でも、所有者独自の部分改良によって所有者特有の使いやすさが加わること。
- 2 大量生産された商品でも、所有者との関わり方次第で所有者を象徴するものと認識できるようになること。
- 3 工場で生産された商品でも、所有者が長い期間使用することで所有者のからだに馴染むようになること。
- 4 心地よいと感じて購入した商品でも、生活空間に溶け込むことによって心地よさが感じられなくなる事。
- 5 ブランド価値が低い商品でも、所有者が継続的に使用することで愛着をもてるようになること。

(G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

- イ 産業ブルジョワジーは、インテリアだけでなく服飾のデザインに対しても同等の関心を持っていた。
- ロ 日用品のデザインに意識的になるわたしたちの性向は、探偵小説で犯人を特定する場合にも利用される。
- ハ ベンヤミンは、ものと空間が生活者の表象となりうるのは産業ブルジョワジーだけの特権と考えていた。
- ニ デザイン性にすぐれた家具を室内に配置することによって、心地よい生活をつくることができる。
- ホ 家具や居住空間の設備にこだわるという点で、かつての産業ブルジョワジーとわたしたちは同類である。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

「鬼とは何か」という命題は、さかのぼるにしたいへんむずかしく、民俗学的な把握にも未開の部分を残している。「鬼ハ婦ナリ」と説明された中国の鬼は、死者の魂の帰ってきた形と考えられているが、この「鬼」の字を「おに」と訓じたとき、中国の「鬼」と日本の「おに」の微妙な混濁がはじまったと考えられる。<sup>(注1)</sup>折口博士は「かみ」「おに」同義説を出し、また「おに」は「大人」であるとして巨人説をとえられた。近くは昭和四十一年、近藤喜博氏<sup>(注2)</sup>によって『日本の鬼——日本文化探求の視角——』(桜楓社)が書かれ、河水近辺より発達する生活と自然現象、そのなかに生まれた鬼への畏怖を追求推考され、日本文化探求の一視角を明らかにしようと考えられている。また、山や河水の妖怪や山人<sup>(注3)</sup>については、柳田国男先生のすぐれた見解も資料的な民話とともに残されているが、これらはいずれも民俗学的な立場から、日本に発生し根づいた鬼の像を追求されたものである。以上のような、鬼の原像追求のなかに民俗学の一分野を見ることは、今日ではすでに常識となったことであるが、これにたいして、<sup>(1)</sup>日本の鬼が土俗的束縛を脱し、その哲学を付与されたのは、中世において鬼女<sup>(注4)</sup>「般若」が創造されたことをもってはじめとしてよい、と考える。

「般若」とはもちろん能の鬼女で、それは中世の鬼のなかでももっとも鬼らしい鬼である。なぜなら、三従の美德に生きるはずの中世の女が、鬼となるということのなかに、もっとも弱く、もっとも複雑に屈折せざるを得なかった時代の心や、苦悶の表情をよみとることができるからである。「般若」の面は、そうした鬱屈<sup>うづく</sup>した内面が破滅にむかう相を形象化して、決定的な成功をおさめたものといえる。時代を代表する文学なり、芸術なりは、多くはそうした尖鋭な脆さや傷つきやすさの面に作品を生みやすいものだが、「般若」の面はそうした意味でも中世破滅型の心情を伝える絶品であり、謡曲<sup>(1)</sup>という、やや文飾にオボれた文学から、鬼女変貌の心を直截につかみ出してきた感がある。

世阿弥は「鬼の能」にふれて、「形は鬼なれども、心は人なるがゆゑに」という一風を想定している。私が「鬼」<sup>(注6)</sup>



とよばれたものの無残について述べようと思うのも、このような人間的な心を捨てかねて持つ鬼にたいする心寄せからである。『今昔物語』の二十七巻は鬼の宝庫であるが、ここでは簡潔なヒツチで事件の経緯を語るにとどめている。中世の鬼女がきわめて独自であるのは、たとえば能の詞章が、鬼とならざるを得なかった女の内面に綿々としてかかわり、あるいは鬼となってからさえ、その洪滞しやまぬ情念のゆくえを問いつづけていることである。美麗な七五調と花鳥故事に粉飾されたその詞章が、悲哀の極致の凄惨さをみせる般若の面と照応するとき、出口なしの中世の心が、まさに女の姿をかりて哀切な叫びをあげているかと思われる。

しかし、このような典型的な「鬼の哲学」が語られた中世においては、「鬼」そのものの出現はやや非現実のあなたのものとなり、「狂言」や『お伽草子』の鬼は、どこかまぬけたユーモラスな感を伴ってえがかれている。いわば、現実に鬼が怖れられ、鬼が現われた時代は、すでに遠くすぎ去っていたのであり、中世における「鬼の哲学」の成立は、過去の時代に跳梁跋扈し、またつぎつぎに消滅・誅戮の運命に服した鬼どもへの深甚なる哀悼追慕の挽歌であったともいえるのである。

そのようなかたちで累々と屍を積み、土に帰したであろう鬼とは何か。それこそ王朝繁栄の暗黒部に生きた人びとであり、反体制的破滅者ともいべき人びとであった。説話の世界にあふれる庶民的エネルギーは、とりもなおさず、破滅しつつ現実を生きぬいた「鬼」どもを支えたポテンシャルティであったといえる。王朝期とは、このような人間的な鬼と土俗的な鬼と、仏教的な鬼とが混然と同居した時代であり、数かぎりない妖怪譚と呪術合戦を生むにいたった時代でもあった。

鬼とは何か。鬼の範疇にはなお未確認の部分が多く残っている。いま、鬼の系譜をかんとんに分類してみると、それは(1)に日本民俗学上の鬼(祝福にくる祖霊や地霊)を最古の原像としてあげることができる。さらには、(2)この系譜につらなる山人系の人びとが道教や仏教をとり入れて修験道を創成したとき、組織的にも巨大な発達を上げてゆく山伏系の鬼、天狗が活躍する。(3)別系としては仏教系の邪鬼の出没、跋扈も人びとをおそれさせた。

以上は神道系、修験道系、仏教系の鬼であるが、これとまったく別種の生活哲学に生きた鬼の族があったことを

考えねばならない。(4)人鬼系といおうか、放逐者、盜賊などで、彼らはそれぞれの人生体験の後にみずから鬼となつた者であり、兇悪な無用者の系譜のなかで、前記三系譜の鬼とも微妙なかわりあいを見せている。(5)ついでに変身譚系とも名づくべき鬼で、その鬼への変貌の契機は、怨恨・憤怒・雪辱、さまざまであるが、その情念をエネルギーとして復讐をとげるために鬼となることをえらんだものである。

そしてここで、私はもういちど、〈おに〉と〈かみ〉とが同義語であつたかもしれぬという説に立ち止まらざるを得ない。それは、いいかえれば人間の心に動く哀切な両面である。空気の清澄な月明の夜、時ならぬ鬼哭の声をきくことは稀ではなく、日頃姿をみせぬことを本領とする鬼が、ふいに闇から手をのべて琵琶の名器を演奏するなど、まことに哀れである。その時、鬼の心に去来した瞬時の回想は何であつたらう。吟遊の声を奪つて詩の下句を付し、敬愛する詩人の門前に拝礼をなして過ぎゆく鬼の心に、常ならぬ心の高鳴りを覚えるのも、じつに、あるいはわれわれ自身が、孤独な現代の鬼であることの証拠かもしれない。

(3) 現代に〈鬼〉は作用しうるか。近世にいたつて鬼は滅びた。苛酷な封建幕藩体制は、鬼の出現をさえ許さなかつたのである。そこでは、鬼は放逐される運命を負うことによつてのみ農耕行事の祭りに生き、折伏(注1)され、誅殺されることによつてのみ舞台芸術の世界に存在が許された。祭りや、歌舞の形式の中に埋もれつつ、その本来的エネルギーも圧殺寸前の状態となつている現在、最後の叫びを上げているような〈鬼〉のすがたに、私は限りない□を覚える。それとともに、機械化の激流の中で、衰弱してゆくほかない反逆の魂の危機を感じる。〈日常〉という、この実りすぎた飽和様式のなかで、眠りこけようとするものを醒(注2)すべく、ふしぎに〈鬼〉は訴えやまないからである。

(馬場あき子『鬼の研究』による)

(注) 1 折口博士——折口信夫(のぶ)。日本の民俗学者、国文学者。釈超空と号した詩人・歌人でもある(一八八七—一九五三)。

2 近藤喜博——古代信仰などを専門とした日本の民俗学者(一九一—一九七七)。

問

- 3 山人——俗世間から離れ、山中に隠れ住む人。
- 4 柳田国男——日本の民俗学者（一八七五—一九六二）。
- 5 三従の美德——女性は生家では父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従うという美德。
- 6 世阿弥——室町時代初期の能役者、能作者。
- 7 一風——他とは異なる独自のおもむき。
- 8 詞章——謡曲・浄瑠璃などの文章。
- 9 花鳥故事——詩歌の題材にする花と鳥や昔から伝わっているいわれや物語。
- 10 修験道——山林に修行し、靈験を感得しようとする宗教。
- 11 折伏——敵を弱め、自分に従わせること。

- (A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書<sup>かいしよ</sup>で記すこと)
- (B) 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。
- (C) 線部(1)について。中世において鬼女〈般若〉が創造されたことをもって日本の鬼に哲学が付与されたと筆者が考える理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 祖霊や地霊といった日本民俗学上の鬼が、中世にいたって鬼女となったことで、時代を代表する文学や芸術に登場するようになったから。
- 2 鬼女〈般若〉の創造により、山や河水の妖怪や山人といった日本に発生し根づいた鬼の像が、鬱屈した内面をもつ能の鬼女へと転換したから。

3 鬱屈した内面をもつ中世の女が、苦悶しつつも三従の美德に反して鬼となるという事象を通して、鬼に対する人々の認識が大きく変化したから。

4 日本民俗学上の鬼が、中世にいたって鬼女〈般若〉として再定義されたことで、複雑に屈折した時代の心を人々に訴えることができたようになったから。

5 鬼女〈般若〉の創造により、山や河水の妖怪や山人といった日本に発生し根づいた鬼が、複雑に屈折した内面をもつ存在へと転換したから。

(D) —— 線部(2)の「〈鬼〉とよばれたものの無残」について。〈鬼〉はなぜ無残であるのか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 王朝繁栄期の暗黒の中、破滅しつつ時代を生き抜いた反体制的な存在だから。

2 消滅・誅戮の運命に服しながら、決して土に帰ることのできない存在だから。

3 復讐のために、怨恨や憤怒といった強い情念にのみ突き動かされた存在だから。

4 女の姿を借りて悲痛な叫びをあげつつも、人々に忌み嫌われ、怖れられる存在だから。

5 人間的な心を捨てかねつつも、疎外されるものとしてしか出現できない存在だから。

(E) —— 線部(3)の「現代に〈鬼〉は作用しうるか」とはどのような意味か。筆者の考えとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 社会の秩序からはみ出した人々を現代の〈鬼〉として扱うことで人々を覚醒させてくれるということ。

2 人間もまた〈鬼〉であるという事実を知らしめ、新しい活力を与えてくれるということ。

3 〈鬼〉の存在が日常に安住する人々の人間本来の激しい情念を揺さぶってくれるということ。

4 舞台芸術や歌舞の中で誅殺された〈鬼〉を蘇らせ、〈鬼〉の魅力を再発見させてくれるということ。

5 農耕行事の祭りに見られる本来の〈鬼〉の姿を蘇らせ、土俗的エネルギーの再生を促してくれるということ。

(F) 空欄  にはどのような言葉を補ったらよいか。最も適当な語を本文中から抜き出して記せ。

(G) 文中で、筆者は「鬼とは何か」を繰り返し問うているが、筆者にとって鬼とはどのような存在か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 限りない同情を禁じ得ない対象
- 2 探求心をそそられる研究の対象
- 3 反逆の魂を喚起する対象
- 4 超越的な存在への畏怖をよび醒す対象
- 5 深甚なる哀悼追慕の対象

(H) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 鬼の系譜には、神道系、修験道系、仏教系、人鬼系、変身譚系があるが、筆者が特に関心を寄せるのは、後の二つであり、どちらもみずから鬼となった存在である。

ロ 〈おに〉と〈かみ〉が同義であるという説は、折口博士が唱えたものであるが、筆者も人間の心に動く表裏一体の、二つの面を捉えたものとして注目している。

ハ 人間的な鬼、土俗的な鬼、仏教的な鬼が混然と同居した中世は、数かぎりない妖怪譚と呪術合戦を生むにいたった時代である。

ニ 中世の「狂言」や『お伽草子』同様、近世に書かれた書物においても、鬼はどこかまぬけたユーモラスな存在として描かれ、過酷な封建幕藩体制の下で生きる人々の日常を支える重要な糧となった。

ホ 柳田国男は資料的な民話において、山や河水の妖怪や山人を日本に発生し根づいた鬼の像として紹介するとともに、これらの鬼が、どのように土俗的支配を脱し、鬼女〈般若〉に転換されたかを解説している。

三 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

今は昔、長能(注1)、道済(注2)といふ歌詠みども、いみじう挑いどみ交かはして詠みけり。長能は、蜻蛉(注3)の日記したる人の兄人、伝はりたる歌詠み、道済、信明(注4)といひし歌詠みの孫にて、いみじく挑み交はしたるに、鷹狩たかがりの歌を二人詠みけるに、長能(注5)、

(1) 霰あられふる交野かたのの御野みのの狩衣かりころもぬれぬ宿すどかす人しなれば  
道済、

ぬれぬれもなほ狩り行かむ(a)はし鷹の上毛うはげの雪をうち払ひつつ

と詠みて、おのおの、「わがまさりたり」と論じつつ、四條大納言のもとへ二人参りて、判せさせ奉るに、大納言のたまふ、「ともによきにとりて、霰は、宿かるばかりはいかでぬれむぞ。(2) ここもどぞ劣りたる。歌からはよし。道済がは、さ言はれたり。末の世にも、集などにも入りなむ(b)とありければ、道済、まひかなでて出でぬ。長能、もの思ひ姿にて出でにけり。先々、何事も長能は上手を打ちけるに、この度は、ほいなかりけりとぞ。(5)

春を惜しみて、三月小なりけるに、長能、

(6) 心うき年にもあるかな二十日あまり九日といふに春の暮れぬる

と詠み上げけるを、例の大納言、「春は二十九日のみあるか」とのたまひけるを聞きて、ゆゆしきあやまちと思ひて、ものも申さず、音もせで出でにけり。(7)

さて、その頃より、例ならで重きよし聞き給ひて、大納言、とぶらひにつかはしたりける返り事に、「春は二十九日あるか」と候ひしを、あさましきひがごとをもして候ひけるかなと、心うく嘆かしく候ひしより、かかる病になりて候ふなり」と申して、ほどなくうせにけり。(8)

「さばかり心に入りたりしことを、よしなく言ひて」と、後まで大納言はいみじく嘆き給ひけり。あはれにす(10)きずきしかりけることどもかな。

(注) 1 長能——藤原長能。

2 道濟——源道濟。

3 蜻蛉の日記したる人——藤原道綱の母。

4 信明——源信明。三十六歌仙の一人。

5 交野の御野——現在の大阪府枚方市一帯にあった平野で、朝廷の御料地があった。

6 はし鷹——小型の鷹。鷹狩に用いる。

7 四条大納言——藤原公任。平安時代中期の優れた歌人。

8 小——小の月。太陰暦では、大の月は三十日、小の月は三十日未満。

問

(A) ——線部(1)の和歌の内容として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 霰が降って鷹狩がうまくいかなかったことを、残念に思っている。

2 霰が降る野に鷹狩に出て狩衣が濡れたことを、わびしく思っている。

3 霰が降る中で行われた鷹狩の美しい情景を、趣深いと感じている。

4 霰が降っていたのに狩衣が濡れなかったので、不思議に思っている。

5 霰が降る中で行われた鷹狩のことを、かえって懐かしく思い出している。

(B) ——線部(a)・(b)の文法上の意味として最も適当なものを、左記各項の中から一つずつ選び、番号で答えよ。  
ただし、同じ番号を二度用いてもよい。

1 推量

2 意志

3 婉曲

4 適當

5 可能

(C) ——線部(2)はどういうことを批判しているのか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 公任自身の和歌の技量が長能、道済に及ばないこと。

2 長能が詠歌の基本的な修練を怠っていること。

3 霰が降っているので鷹狩に出かけなかったこと。

4 霰の詠まれ方が霰の実態に合っていないこと。

5 狩衣がひどく濡れたので鷹狩を中止したこと。

(D) ——— 線部(3)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 道済の歌は、将来賞賛を受けることが期待されている。

2 道済の歌は、誤りがなくみごとに詠まれている。

3 道済の歌は、品格があることが評価されている。

4 道済は、長能の歌の欠点を正しく指摘なさっている。

5 道済は、長能の歌の品格を高く評価なさっている。

(E) ——— 線部(4)から読み取れる道済の気持ちとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 感謝                      2 敬愛                      3 恐縮                      4 安堵                      5 歡喜

(F) ——— 線部(5)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 いたたまれないことだった                      2 思いがけないことだった

3 うかつなことだった                      4 残念なことだった

5 不運なことだった

(G) ——— 線部(6)のように言う理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 今年は春が一日早い日付で暮れるので。

2 今年は春がわずか二十九日間しかないので。

3 今年はなぜか春が短く感じられるので。



4 今年の春が最後の春になる予感がするので。

5 今年の春はひと月しか残っていないので。

(H) 線部(7)とほぼ同様の意味を表している語句を、本文中から十字以内で抜き出して記せ。ただし、句読点は含まない。

(I) 線部(8)の現代語訳を十字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(J) 線部(9)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 軽率に                    2 大きさに                    3 一方的に                    4 しかたなく                    5 申し訳なく

(K) 線部(10)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 評価は人により異なっていた                    2 風流の道に打ちこんでいた

3 互いに尊重しあっていた                    4 やさしく思いやっていた

5 あまりにも執着が深すぎた